

## 二世の同化志向から三世のエスニック・プライド への変容を読む —二世へのインタビューと三世の文学—

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

小松 恭代

### 要旨

70年代の初頭、日系三世を中心にリドレス運動が始まる。リドレス運動とは、第二次世界大戦中の強制収容政策により被った有形、無形の損害に対する公式謝罪と金銭的補償をアメリカ政府に求めた運動である。三世は公民権運動やアジア系アメリカ人運動に刺激を受けてエスニック意識に目覚め、日系の文化的継承や歴史に関心を寄せるようになった。それは同時に、主流階級の生活様式や価値観への追従の拒否を意味し、二世の同化志向からの転換を示すものである。強制収容を経験した二世としていない三世の間には、日系というエスニシティに対する意識の違いがある。二世は収容所に収監されたことで、スティグマ化されたエスニシティを拒絶し同化志向を強めたのである。文学作品においては、この世代間の違いがどのように扱われているのだろうか。本稿ではまず、サンディエゴの二世に行ったインタビューに基づき、強制収容の体験を振り返る。そして、三世作家のシンシア・カドハタ、デイヴィッド・ムラ、リディア・ミナトヤの作品において、二世の強制収容の記憶や戦後の同化志向がどのように描かれているかを分析する。三世が両親世代の同化志向に抵抗し、日系というエスニシティの肯定へと向かう意識の変容をたどってみたい。

### キーワード

強制収容, 同化, エスニック・アイデンティティ

## From Nisei's Denial to Sansei's Affirmation of Japanese Ethnic Identity: Interviews with Nisei and Sansei's Literature

KOMATSU Yasuyo

### Abstract

In the early 70s, stimulated by the civil rights movement and Asian American movement, Sansei, a younger generation of Japanese Americans, started what is known as the "Redress Movement," an effort to obtain an official apology and reparations from the federal government. Sansei became conscious of their ethnicity and interested in culture and tradition the Issei generation brought from Japan, which, at the same

time, indicates that they refused to follow the mainstream values, unlike Nisei. There is a generational gap in ethnic consciousness between Nisei who went through concentration camp and Sansei who didn't. Nisei rejected Japanese ethnicity stigmatized by being incarcerated as enemy alien, and tried to assimilate into the mainstream. How is this generational difference dealt with in literary works? In this paper, first, I will trace the camp memories of Japanese Americans, based on my interviews with Nisei living in San Diego. Then, analyzing how Nisei's camp memories and their assimilation after the war are described from a Sansei viewpoint in the works of Cynthia Kadohata, David Mura, and Lydia Minatoya, I will discuss that Sansei resist their parents' inclination for assimilation and feel proud of their Japanese American ethnicity.

### Key Words

internment, assimilation, ethnic identity

## はじめに

70年代の初頭、公民権運動やアジア系アメリカ人運動に刺激された日系三世を中心にリドレス運動が始まる。リドレス運動とは、第二次世界大戦中の強制収容政策により被った有形、無形の損害に対する公式謝罪と金銭的補償をアメリカ政府に求めた運動である。「白人アメリカ人流のアメリカ化の拒絶、人種差別や社会的不正義への抵抗」という精神を高く掲げたアジア系アメリカ運動が高揚するなかで（竹沢166）、三世は強制収容をアジア系に対する人種差別の象徴的な事件として他のアジア系アメリカ人と共に問題化していった。三世はエスニック意識に目覚め、日系の文化的継承や歴史に関心を寄せたが、それは同時に、主流階級の生活様式や価値観への追従の拒否を意味し、二世の同化志向からの転換を示すものである。二世は強制収容所を出所後、主流社会に受容されるために懸命に努力し、アメリカ化し、同化しようとしたと言われる。彼らは収容所内で主流社会への同化を強く奨励された上に、収容所を出るとアメリカ社会は冷戦構造下であり、白人中産階級の一元的な価値への同化、アングロ・コンフォーミティが強化されていた。また、アメリカ人にもかわらず敵性外国人として収監された

ことで、日系というエスニシティを恥じていた。こうした要因が作用し合い、二世は日本語や日本の文化の継承を失い、白人中産階級の文化的基準を吸収していく。強制収容問題はもちろん、戦後も存続する日常的な差別や偏見にも沈黙して「120%アメリカ人」となるように努め（竹沢132）、モデル・マイノリティとなっていく。ここで注目したいのは、二世と三世の世代間に見られる日系というエスニシティに対する姿勢の違いである。自らのエスニシティを拒絶して同化志向であった二世に対し、三世は日系の文化や歴史に関心を寄せて自らのエスニシティを肯定的にとらえようとしている。では、こうした世代間のエスニック意識の相違は文学作品においてどのように描かれているのであろうか。

本稿ではまず、二世が戦後日本の文化や伝統を棄却し主流社会への同化に努めるようになった背景を考えたい。強制収容体験に関しては二世作家が自叙伝や小説の形式で作品を書いているが、ここではボストン収容所に収監されたサンディエゴに住む二世へのインタビューをもとに、日本軍のパールハーバー攻撃から収容所を出た後までの二世の体験をたどる。<sup>1</sup> 彼らは6才から19才の時に収容所に送られており、収容体験の記憶はさまざまであるが、一人一人の強制収容をめぐるライ

フ・ヒストリーは無形文化資源として非常に重要だと思われる。次に、80年代の終わりから90年代にかけて書かれた三世の作品において、二世の強制収容の記憶や戦後の同化志向がどのように描かれているかを分析する。そして、三世が両親世代の同化志向に抵抗し、日系というエスニシティの肯定へと向かう意識の変容をたどってみたい。扱う作品は、シンシア・カドハタ (Cynthia Kadohata) の『フローティング・ワールド』(*The Floating World* 1989),<sup>2</sup> リディア・ミナトヤ (Lydia Minatoya) の『雪の中で高僧に話しかける』(*Talking to High Monks in the Snow: An Asian American Odyssey* 1992), デイヴィッド・ムラ (David Mura) の『肉体が記憶と出会う場所—人種、性、アイデンティティをめぐる漂泊』(*Where the Body Meets Memory: An Odyssey of Race, Sexuality and Identity* 1996) 及び『僕はアメリカ人のはずだった』(*Turning Japanese* 1991) である。

## 二世の強制収容の記憶

—サンディエゴでのインタビュー(2010年7月24日~8月11日)

### (1) パールハーバー攻撃と強制立ち退き

1941年12月7日、日本軍はパールハーバーを攻撃し、それを引き金にアメリカは太平洋戦争に突入した。その日、サンディエゴに住む日系人の子供たちの多くは日本学校に行っていた。

日本学校から家に帰って来た時、月曜日には白人の子供たちと学校で会うので心配してパールハーバーのことを家で話していましたが、学校に行っても誰も戦争については話していませんでした。教室ではハクジンの子供たちと私たちは分かれていて、誰も私たちに話しかけてきませんでした。みんないつもと少し違っていました。(ミチオ・ヒマカ)

パールハーバー攻撃は日曜日だったので、教会へ行っていた人たちもいる。

パールハーバーの日には教会に行っていました。日曜学校が終わって家に帰ろうとすると、

フェリーに乗れませんでした。あの人たちは乗り場全部に柵をして、小さい子供なのに私たちを追い出しました。戦争が始まったので、刑務所のように柵で囲ってしまったのです。夜の10時頃まで動けませんでした。子供達はどこへ行っただろうと、お父さんやお母さんが心配して待っているのに。教会の白人の人が来て、子供たちだからフェリーを出してあげてくださいと言ってくれたので、やっとフェリーに乗ることができました。ですから、パールハーバーは忘れられません。(レイコ・マルヤマ)

パールハーバー攻撃を知った時、白人から嫌がらせを受けるのではないかと不安になった子供がいる一方で、日本に怒りを向けた子供もいた。

私の弟は7才でした。パールハーバーのことが分かった時に、「日本人全員を僕が殺してやる!」と言いました。日本は悪いことをしたと言って、ものすごく怒っていました。あんなに小さい子が日本に怒っていました。(マルヤマ)

パールハーバー攻撃は日系人に大きな衝撃を与えたが、10才以下の子供にも不安や恐怖、怒りの感情を引き起こしたことがわかる。また、その晩から翌朝までに、数年来用意していたブラックリストに基づき、FBIはコミュニティの指導的人物だった人たちを連行した。

兄の無線機が没収されました。それに彼らは台所にあった包丁ももって行きました。父はFBIに連行されましたが、一晩だけで帰ってきました。(エルシー・ソゴウ)

私の父は12月7日の真夜中にFBIに連れて行かれました。戦争が始まるずっと前から、検挙される人は決まっていたのです。でなければ、あんなに早く彼らが来るはずがありません。FBIは誰がコミュニティの指導者なのかを知っていました。彼らが最初に検挙されたのです。父がいなくなって母は困りました。日系の家庭では父親が大黒柱で、いろんなことを一人で決めていたからです。母は、それまで自分の仕事でなかったことを父に代わってやらなければならなくなりました。父が帰って来たのは3年半

後の1944年でした。私の誕生日の1日前に、ボストン収容所に来たのです。あの日のことは決して忘れません。(ヒマカ)

私の兄のロイはサンディエゴで内科を開業していました。ある日病院に行くと、オーバーを着たとても身なりのよい二人連れがいました。「タナカ先生ですか」と一人が聞きました。「そうです」と答えると、彼らはFBIのバッジを見せて、「ご同行願えますか?」を言いました。兄は「どこへ?」と尋ねましたが、「一緒に来て下さればいいのです」と二人は答え、兄をダウンタウンにある警察署へ連れて行きました。兄に名前やその他諸々のことを聞いた後で、「昨晚はどこへ出かけましたか?」と聞きました。「コロナド島へ行きました。」「どうして行ったのですか?」「一人の患者さんから電話をもらったからです。」「どの言葉で話しましたか?」「日本語です。」「どうして日本語を使ったのですか?」「患者さんは一世で片言の英語しか話しません。日本語ならすらすらと口から出てくるからです。」「どんなことを話しましたか?」「彼の症状について話しました。」FBIの捜査官はその後次々と質問し、兄の発言はすべて記録されました。尋問は1時間にも及び、やっと兄は釈放されました。

(フランシス・イサオ・タナカ)

FBIから尋問を受けたことで、タナカの兄は決してアメリカ政府を許さず、義憤を心に抱えたまま亡くなったと言う。メアリー・マツダ・グルーネワルドの自叙伝にも、コミュニティの指導的立場にいる人々が次々と検挙されていく中で、次は父親の番ではないかと不安におびえる家族の様子が描かれている。<sup>3</sup> 彼女の家族はスパイ嫌疑を受けないように日本とのつながりを示す品々を燃やすが、それはどの日系家庭でも行われたことだった。

家にあった日本の物は全部燃やしました。全部です。ひどく嫌な思いがしました。母が日本から持ってきたひな祭りの人形も全部そろっていたのに、全部焼いてしまいました。母は泣い

ていました。(マルヤマ)

家族のアルバムや日本の親戚からの手紙、日本語の本や日本から持ってきた家財道具など、家族が大事にしてきたもの、家族の歴史がすべて灰燼と化したのである。

1942年2月19日にフランクリン・ローズヴェルト大統領が発令した行政命令第9066号に基づき、4月1日にサンディエゴで立ち退き命令が出された。人々は電柱や、図書館、郵便局に貼られたビラで、立ち退きは4月8日だと知った。

立ち退きまでたった1週間しかありませんでした。しかも、持って行くことができたのは一人につきスーツケース一つだけでした。私の家は農家で、収穫を待つ農作物がありました。でも、40エーカー分の農作物をそのままおいて行かなければなりませんでした。立ち退き命令は各家庭や個人に通知されたものではありません。電柱や郵便局にはりだされていただけでした。

(ベン・セガワ)

スーツケース一つしか持って行くことができず、すべてを置いて行かなければなりませんでした。畑には収穫間近のキュウリが育っていましたが、収穫できませんでした。たくさんのお金を失いました。土地はリースでしたが、家は父が建てました。立ち退きの日に、ある韓国人の家族が来て私たちの家に住み始めました。彼らは私たちが出て行かなければならないのを知っていたのです。(H.M)

私が覚えているのは、「出て行け。スーツケース一つ持って出ていけ」と言われたことです。バスに乗って、それから汽車に乗って収容所に行きました。あんなにたくさんのお金と日系アメリカ人が一つの場所にいるのを見たのは初めてでした。(ジョン・ハシグチ)

1週間で一体何ができるでしょう? 冷蔵庫、車、テレビはどうしますか? 隣人に預けるか(信頼できる人であればの話ですが、ほとんどの場合そうではありません)、売らなければなりませんでした。テレビを10セントで。みんなどれだけのお金を失ったことか、想像できませ

ん。(タナカ)

インタビューした人たちの多くが農家であった。S.Yの父は最初シアトルにいたが、鉄道で働きながらサンディエゴに来て農業を始めた。H.Mの父はサンフランシスコ郊外の白人家庭で家内労働に従事し、その後ターミナル・アイランドで漁師になったが、友人に誘われてサンディエゴで農業を行った。立ち退き命令が出された後、人々は急いで農作物を収穫したが、大半はそのまま置いて行かなければならなかった。また、農作物の値はたたかれることが多かった。家具、電気製品などの品々も二束三文で買い叩かれた。古物商がうろつき、いずれは手放さなければならぬ弱みにつけこんでとんでもなく安い値を提示した。ジョン・ワカツキ・ヒューストンの『マンザナールよ、さらば』には、祖母が日本から持ってきた高価な食器のセットにタダ同然の値をつけられて立腹した母が、古物商の目の前で床にお皿を次々と投げつけて割る場面が描かれている。<sup>4</sup>

## (2) サンタアニタ仮収容所とボストン収容所

サンディエゴの日系人は最初、サンタアニタ仮収容所に送られ、そこで数ヶ月過ごした後にアリゾナ州のインディアン居留区に建設されたボストン収容所に収監された。

最初、サンタアニタに行きました。そこは馬小屋だったところですから、とてもくさい所でした。トイレとシャワーは一つの大きな建物の中にあいました。トイレは男性用と女性用に分かれ、仕切りもありました。でも、シャワー室はシャワーヘッドがたくさん並んでいるだけで、仕切りはありませんでした。食事はメスホールと呼ばれる食堂で食べましたが、あまりおいしくありませんでした。ある日の献立は豆とご飯だったのですが、フォークがなくてナイフで食べなければならなかったのを覚えています。ボストン収容所ではいつも友達と一緒に楽しかったです。カリフォルニア中から来た人たちと友達になりました。夫ともそこで知り合いました。収容所は私にとって悲しい思い出の場

所ではありません。でも、両親には収容所生活がつらかったと思います。父は絵を教えていました。母は働きませんでした。収容所は砂漠にあったので、朝はとても寒く、午後になるととても暑くなりました。私は19才でした。ブロックごとに作られた管理人室で秘書の仕事をしていました。(H.M)

サンタアニタでは学校もありました。二世が先生でした。でも、彼らには教師の資格がなかったのでいい授業だったかどうかはわかりません。ボストンには小学校、中学校、高校がありました。二世の大学生が先生の場合と、外部から来た資格のあるアメリカ人教師に教わる場合と半々でした。(ソゴウ)

ソゴウの体験談は、二世作家のウチダ・ヨシコがタンフォラン仮収容所の学校で教えていた話を思い出させる。<sup>5</sup>

収容所に入った時は6才だったので、収容所のことはあまり覚えていません。日本語で育ったせいで、白人居住区の学校に通っていたときは言葉がわからず孤立していました。先生もどうしたらよいかわからず困っていました。収容所では日本語で話ができる友達がいて楽しかったです。今日本語はほとんど話せませんが。

(グレース・サワサキ)

私にとって収容所の生活はひどいものではありませんでした。でも、両親はつらかったと思います。すべてを失ったのですから。短時間の間に売れる物はすべて処分しなければなりません。収容所では父は清掃の仕事をして月に19ドルもらっていました。(ハシゲチ)

収容所では友達と遊んでばかりいました。あそこのメスホール（食堂）の食事がおいしいと聞くとそこに友達と行きました。また、料理人が替わったと知ると友達と連れだって食べに行きました。いろいろなメスホールに行って食事をしました。(S.Y)

父は土地をリースしてキュウリを作っていましたが、貧乏で日本学校には行かせてもらえませんでした。収容所で父は毎日のんびりして将

棋ばかりしていました。子供七人と母を養う責任から解放されて幸せそうに見えました。父は60才を越えていました。母は食堂で働き、月に12ドルもらっていました。毎月クーポンがもらえました。それを持って収容所内のお店にお菓子を買いに行くのが楽しみでした。近くの居留地からインディアンの高校生が来て交流したのを覚えています。(ソゴウ)

強制立ち退き令が出される前に発令された任意立ち退き令に従って、カリフォルニアから自発的に内陸に立ち退いた家族もいた。

私たちはユタ州に移住しました。ユタではとても怖い体験をしました。人生で最悪の体験でした。学校に行くのにスクールバスに乗ると、男の子達が服を脱がせようとしたのです。恐くて学校に行くのが嫌になりました。私は12才でした。姉と二人で母に、「首の上まであるコートを作してほしい」と頼むと、母は「どうして」と聞きましたが、理由は絶対に言えませんでした。母はたくさんの心配事を抱えていたので、これ以上の心配をかけたくなかったのです。母は望み通りのコートを作ってくれましたが、毎日バスに乗ると男の子達に会いました。何事もなかったのが不思議なくらいです。戦前は、父が「家で話していいのは日本語だけ」と言うので家族とは日本語で話していましたが、戦争が始まると「日本語は使うな。目立たないようにしろ」と言ったので、戦時中は英語しか話せませんでした。(マルヤマ)

収容生活により、家族関係が破壊されたと言われている。父権的な日系家族では父親が圧倒的な力をもっていたが、収容所ではその権威や統制力を失った。S.Yやヒマカ、H.Mが語っているように、子供たちは家族よりも友人たちと一緒に食堂で食事をしたり、夜遅くまで仲間と過ごしたりした。グルーネワルドの自叙伝には、子供たちがほとんど親と一緒に時間を過ごさなくなってしまったことを嘆く母親の話が描かれている。<sup>6</sup>

陸軍が二世のみの戦闘部隊結成を計画したことにより実施された忠誠審査は、多大な精神的苦悩

と葛藤を引き起こした。<sup>7</sup> また、その返答をめぐって親子の間やコミュニティに亀裂が生じた。<sup>8</sup>

アメリカ人であることを証明するために、二世は入隊し、命を犠牲にしました。二世部隊は当たって砕けた(“Go for broke”)のです。<sup>9</sup> 本当に多くの死傷者が出ました。でも、彼らの功績はなかなか正式に認められませんでした。名誉勲章がクリントン大統領によってホワイトハウスで授与されたのは2000年6月でした。

(セガワ)

あれだけの人種差別を受けながら、多くの人たちが陸軍、第100大隊や442部隊に自ら入隊したのはなぜなのだろうとよく考えます。多くの人々がアメリカに忠誠を誓って入隊したことに驚かされます。「なぜ?」という問いには、「アメリカ人だから」という答えしか思い浮かびません。(タナカ)

親しい友人の一人が「ノー・ノー・ボーイ」です。「ノー・ノー・ボーイ」はコミュニティにおいて、現在でも難しい問題です。忠誠審査や「ノー・ノー・ボーイ」について話す時は気を使います。(セガワ)

強制収容に対する感情はさまざまであり、収容された年齢によっても受け止め方は異なるようだ。インタビューした人たちは収容時3才から19才であり、楽しい場所だったと答えた人が多かった。ソゴウの父のように、収容所でそれまでの苦勞の多い生活から解放され、何もしなくても食事が与えられる生活に満足し、やっと休養を得たと感じた人がいたことは興味深い。

### (3) 収容所出所後

戦後も、日系人は人種差別にさらされた。収容所で楽しく過ごした人たちも出所後、アメリカ社会に存在する日系人に対する敵意や憎悪を認識した。彼らが収容所を出た後に体験した差別を語るのは年齢と関係があるだろう。戦前や収容時は年少過ぎて反日感情を意識したり、強制収容が人種差別に基づくものであることを理解できなかったためであろうと考えられる。

1945年、9月、父が友人と農場をやることになり収容所を出ました。15才でした。私たちには行く所、住む所があり、父には仕事がありました。汽車がサンディエゴの駅に入って行った時、石を投げつけられました。彼らは私たちに戻って来て欲しくなかったのです。でも、他に行く所がありませんでした。私は十人兄弟の6番目で、その時四人の兄は全員アメリカ軍にいました。私たち家族が強制収容所に収監されている間、四人の兄は軍務についていたのです。

(セガワ)

収容所を出ても住む所がありませんでした。それで、政府が提供した連邦住宅に住みました。海軍の人たちや家族が住んでいた建物です。戦争が終わりたくさんの軍関係者が出て行ったので、その住宅に行くところのない日系家族に提供したのです。そこでの生活はそんなに悪くありませんでした。でも、五人の仲間と一緒に地元の学校に行った最初の日のことです。私は6年生か、7年生でした。歩いていくと学校のそばにたくさんの人がいるのが見えました。そして、「おい、ジャップ。この学校に来るな!」とその人たちから言われました。とても恐くなりました。どうしようと思っていると、ある男の人がやってきて、「心配しないでいい。一緒に来なさい。大丈夫だから」と言ってくれました。「はい」と言って、私たちはその人について学校の中に入りました。私は11才でした。友人の一人が校長先生のところに行ってこのことを話しました。全校集会があった時に、校長先生は私たちを前に並ばせて、「この人たちも君たちと同じようにアメリカ人です」と言ってくれました。それを聞いてとてもうれしく思いました。あれは本当に恐い体験でした。

(ハシグチ)

結婚してオーシャンビーチという町に住みたくてアパートを探しました。借りたいところが見つかったのですが、大家は私たちに部屋を貸してもいいかどうか他の住人の了解を取らなければなりませんでした。その時に初めて自分の

人種を意識しました。その町はハクジンが多く住む地域だったので、差別されても仕方がないと思いました。(グレース・サワサキ)

人々は生活の再建に力を注いだが、差別のために新しく仕事を得るのは難しく、再建は楽ではなかったようである。東部に仕事を求めて移住した人たちもいる。一部の幸運な人たちを除き、戦前に所有していた家屋や資産を失っていた。友人や隣人に預けた財産や所有物も、収容所から帰ってみると大半は失われていた。

私たちがリースしていた土地の大家が使っていると言ってくれたので、ある建物の中に農具や農機具、トラック、それも買ったばかりの真新しいトラックを入れておきました。大家が預かってくれたのです。でも、収容所から帰ると残っていたのは農具だけでした。誰かが建物の中に侵入し、私たちが置いていったものを取っていったのです。(セガワ)

隣人に家の物を預けましたが、帰ったら何もありませんでした。一世の両親はショックを受けました。再び一からやり直さなければならなかったからです。彼らは日本から移住して来た時と戦後、二度も最初から始めなければなりませんでした。最も打撃を受けたのは一世でした。彼らは30年間、40年間この国に住んでいましたが、1952年までアメリカ市民になることができませんでした。ヨーロッパからの移民は5年住めば市民権を申請することができました。日本人、中国人、フィリピン人はなれませんでした。戦前は「外国人土地法」で土地を所有することができず、子供の名前で買ったり、リースして数年ごとに移動しなければなりませんでした。強制収容が一番こたえたのは一世でした。(ヒマカ)

収容所を出て、私たちはコロラド州のデンバーに行きました。そこには日系コミュニティがありました。夫は料理人でした。最初の息子はデンバーで生まれ、私は主婦でした。(H.M)

夫のジョンはコロラドに住んでいました。このハクジンはいい人たちだったそうです。ユ

タ州とコロラド州は信じられないくらい、昼と夜ほど違います。ジョンが言うには、白人はドイツ系で第一次世界大戦の時に差別的扱いを受けたので、排除されるということがどういうことかわかっていたそうです。親切な人々の間で暮らすことができて、ジョンはラッキーでした。(マルヤマ)

戦争が終わってから、オハイオ州のクリーヴランドに家族で移住しました。サンディエゴでは仕事が見つからなかったからです。そのハクジンは日本人を見るのは初めてという人が多く、「日本人です」と言っても何も問題は起きませんでした。いろいろ助けてもらいました。近所に住んでいたハクジンの多くがポーランド系でした。ドイツ系のハクジンもいました。家族は窓ガラスの工場で働きました。きつい仕事でした。女性では縫製の仕事をする人がたくさんいました。(ヒマカ)

姉は、ミネアポリスの白人家庭に住み込みの家政婦の職を得て収容所を出ました。働いてお金を貯めてアパートに住むようになりました。高校三年生の時に収容所を出て姉の元に行き、そこから高校に通いました。ミネソタ大学に入るつもりでしたが、G.I.Bill(復員兵援護法)のために入学を望む復員兵がたくさんいて入れませんでした。代わりにUCLAに行って小学校の先生になりました。日系人であることで嫌な思いをしたことはありません。(ソゴウ)

戦前は農場をリースして作物を作っていました。戦後サンディエゴに戻って来たら、家族は農場に働きに出ました。兄や姉は働いてお金を貯め、農地を買いました。(S.Y)

戦前は二つの食料雑貨品店を持っていました。日本から来たので所有はできず、リースしていました。お客は白人が多く、父は英語を流暢に話し、アメリカ人の友達もたくさんいました。祖父は戦争が終わったら日本に帰ると言っていたので、すべてを売り、処分して収容所に行きました。帰って来た時は本当に貧乏でした。祖母と弟はリビングルームに寝て、妹と私

は小さな部屋で寝ました。(サワサキ)

収容所から帰った時、誰も私たちを雇おうとはしませんでした。仕事を見つけることができたのは地方公務員のように役所関係だけでした。だから、自分で仕事を始めるしかなかったのです。多くの二世の男性が庭師になりました。トラックと芝刈り機と50フィートのホースがあれば庭師の仕事ができたからです。その仕事で私たちは生き残りました。大学を出た二世がたくさんいましたが、誰も雇いませんでした。二世は英語が話せたのでなんとか生き残ることができました。でも親の世代、一世には難しいことでした。強制収容で一番傷ついたのは一世です。(セガワ)

両親は強制収容ですべてを失いましたが、決して不平を言いませんでした。父は庭師になり、母は缶詰め工場で働きました。

(スティーヴン・サトウ)

日系コミュニティは戦後も続く反日感情を再確認したが、差別に抵抗することはなかったようである。強制収容についても沈黙を通した。

両親は収容所のことはいっさい話しませんでした。だから、子供の私たちも話題にしませんでした。両親がひどく傷ついているのを知っていたからです。(ハシグチ)

長い間収容所について人々は黙っていました。話し始めたのは最近です。収容所に入られた事を恥だと考えていたからだと思います。みんな恥ずかしかったのです。多くの人が日本人であることを隠そうとしました。「日本人です」と言いたくなかったのです。(ヒマカ)

ダウンタウンに行くと、「どこから来た？中国人か？」と聞かれました。「いいえ」と答えると、「日本人だろう？」と言われたので、「私も日本人は嫌いです」と答えました。(S.Y)

収容所から出てきた時あまりに傷ついていたので、誰も収容所のことは話したくなかったのです。私たちは「仕方がない」と言って耐えました。それは両親のしつけと関係があると思います。両親から権威に敬意をしめすことを教わ



りました。権力者が間違っただけをしても批判してはいけなかったと言われました。言うべきことは「はい、分かりました」だけなのです。それと我慢です。そのおかげで私たちは生き残ることができました。(セガワ)

両親に教えられたのは「家族に恥をかかせるな」ということでした。子供の教育でもそれはあてはまります。並みではいけないのです、上にいなければいけません。負けてはいけない、一番になるように努力するのです。そうやって戦後を生きてきました。(タナカ)

彼らが沈黙を破って話し始めたのは、公民権運動やアジア系アメリカ人運動に影響を受けてシアトルを中心に始まったリドレス運動が成功した後であった。

1988年8月8日、レーガン大統領が補償法案に署名した日以降に生存していれば2万ドルももらえました。私の義兄は大統領が署名した5時間前に亡くなったので、補償金はもらえませんでした。(ヒマカ)

一番苦しんだのは両親でしたが、もう亡くなっていたので補償金はもらえませんでした。(S.Y)

私たちが収容所のことを話し始めたのは50年後でした。子供達が強制収容に興味をもち、何があったのかを聞いてきたからです。人々が体験を共有し合うのに50年かかりました。

(セガワ)

人々が収容体験を話し始めたのは20年ぐらい前です。サンディエゴ日系歴史協会(The Historical Society of San Diego)が活動を開始した頃です。(ヒマカ)

しかし、沈黙したままで強制収容体験を忘れてしまいたいと思っている人もまだたくさんいるようである。また、収容体験を外部で話すことについてはコミュニティ内で意見が分かれている。

まだ多くの人が収容所のことは話したくないと思っています。私は学校や大学に出かけて収容所体験を話していますが、「なぜそんなことするのか?自分がしていることが分かっている

のか?」と言う人がいます。彼らはまだ深く傷ついているのです。(セガワ)

日系コミュニティを救ってくれたのは戦時中の442部隊の活躍です。彼らは私たちにプライドを与えてくれました。彼らのヨーロッパ戦線での活躍に誇りを感じました。でも、彼らは現在でも自分たちのことを話そうとしません。だから、私たちが彼らのことを話すのです。それは日系人であることのプライドの問題です。442部隊の人たちのお蔭で、私たちには何も恥ずべきものがないと思えたのです。(ヒマカ)

インタビューをお願いした二世の中に、「収容所のことは絶対に話したくない。母にも収容所のことを尋ねて動揺させないでほしい」と語った女性がいた。強制収容から60年以上が経過した21世紀の現在でも、収容所の話題は絶対に避けたいと思っている人たちがいる。強制収容は日系コミュニティにとって過ぎ去った過去の話ではなく、現在の生活にも影響を及ぼしている問題である。

#### (4) 同化とモデル・マイノリティ

収容所にいる間に、日系人たちは同化の奨励を受けた。出所後は強制収容問題に沈黙し、「120%アメリカ人」になるように努めたと言われている(竹沢132)。その結果、日系人は社会的上昇を成し遂げ、モデル・マイノリティと呼ばれてその成功が讃えられた。<sup>10</sup>

私たちはモデル・マイノリティです。強制収容されたことで教育について考え始めました。私には四人子供がいますが、全員を大学に行かせ、そのうち二人は大学院を出ました。

(セガワ)

戦後日系人は不平を言わずに一生懸命働いたので、主流社会から尊敬され認められるようになりました。日本とアメリカは戦争中だったので、強制収容はある意味当然のことです。私は貧乏だったので高校しか出ていませんが、会社を興し社長になりました。学歴のない者にも成功のチャンスを与えてくれる国はアメリカしかありません。私はこの国に感謝してい

ます。(サトウ)

中には強制収容に抵抗した人もいました。そんなことしないで言われた通りに収容所に入るべきでした。人種差別もあったのですが、政府は私たちを守るために収容所に入れたのだと思います。(H.M)

3年前に、ユダヤ人の高校に招待されて収容体験を話しました。教室に歩いて入って行くと、生徒は何かが違うというように私を見ました。話をして、質疑応答も終わりました。すると三人の生徒が私の所に来て、「セガワさん、最初入って来た時はあなたのことを日本人だと思いました。でも今は、僕よりもずっとアメリカ人だと思えます」と言いました。その時、言いたいことが伝わったのだとうれしく思いました。(セガワ)

次は白人男性と結婚した女性の話である。

モンタナ州に住んでいたので収容所には送られませんでしたが。砂糖大根の畑に収容所から多くの男性が働きに来ていました。収容所の様子を聞いてかわいそうに思いました。政府機関に勤める夫と結婚した時、私のせいでアパートがなかなか借りられませんでした。シアトルにも住みましたが、日系の人たちとはつきあいませんでした。夫の仕事の関係で合計7年間日本に住みましたが、日本語は全然話せません。

(H.A)

インタビューした人たちは両親から教えられた「我慢」「恥」の概念に支えられて、アメリカ社会で生き抜くために努力し、子供を大学に行かせ、ある程度豊かな生活が送っているようであった。彼らの戦後の努力はセガワの言葉に表れているように、「アメリカ人になること」のために向けられていたと言えるだろう。ヒマカとS.Yは442部隊の活躍に刺激されて、出所後にアメリカ軍に入隊したと言っていた。強制収容でアメリカ人であることを拒否された彼らにとって、入隊はアメリカ人であることを証明するものである。一方、スティグマ化された日系というエスニシティを避けたい気持ちがH.Aの話から読み取れる。白人と結

婚した後は日系の人々とのつき合いを避け、日本語は一切使わない生活を送った。それは日系人と自分を差異化し、白人化したい願望を表している。また、H.Mは戦前、お正月には彼女の母がおせち料理を作り、鯛やエビ、おもちを食べたが、結婚後自分の家庭ではその伝統は失われ、アメリカ風の生活をしたと言っている。サンディエゴの日系コミュニティが日本文化をそれほど大事に思っていなかったことは、サンディエゴ日系歴史協会が、サンディエゴ・シティ大学のドン・エステス教授(Prof. Don Estes)の尽力によって設立されたことからわかる。日系コミュニティの歴史や文化が失われつつあることを危惧したのは白人の大学教授であった。サトウが強制収容で両親はすべてを失ったにもかかわらず、「戦争中だったのだから強制収容は当然のこと」「アメリカに感謝している」と言っているように、戦後二世は収容所体験には口を閉ざし、主流社会に同化するモデル・マイノリティとなっていたのである。

## 2. 二世の強制収容の記憶と三世のアイデンティティ

三世の作家、シンシア・カドハタの『フローティング・ワールド』は、第二次世界大戦後の1950年代、60年代に仕事を求めてオレゴン、カリフォルニア、ワシントンで車を移動し、最終的にアーカンソー州のギブソンという町に定住する日系家族を描いている。カドハタはシュウ・チェン・リーによるインタビューの中で、日系の作品であるにもかかわらず強制収容の記述がほとんどないことを批評家は問題にすると述べている。確かに、登場人物が収容体験を自ら語る場面はない。サンディエゴの二世が戦後長い間誰も収容所のことは話さなかったと語っているように、強制収容の記憶は登場人物の沈黙の奥底に閉じ込められていると見る事ができるだろう。しかし、彼らの言葉や振る舞いの中にその閉じ込められた記憶の断片を読み取ることができる。たとえば、継父のチャーリー・オーは語り手/主人公のオリヴィアに、「手が心のように感じてくれる。手に感じさ

せるというのは軍隊で教わったやり方だ。手が感じるから、心は感じなくてすむ」と言う(144)。「軍隊」は強制収容所で実施された忠誠審査を連想させ、「手が感じるから、心は感じなくてすむ」という言葉に、収容所に収監された状態でアメリカ国家への忠誠を強いられたトラウマがうかがえる。インタビューからサンディエゴの二世が戦後主流階級への同化に励んだことがわかるが、『フローティング・ワールド』には二世の強制収容のトラウマ記憶や同化志向が描かれている。カドハタは、三世のオリヴィアの視点を通じて二世の同化志向を批判的に描くことによって強制収容に抵抗を示しつつ、二世とは異なる三世の日系文化に対する姿勢を提示していると考えることができる。

この作品の始めの部分ではオリヴィアの家族の移動生活が描かれているが、これは強制収容で財産や経済的基盤を失っていた上に、日系人への偏見や差別が依然として社会に存在していた事実を表している。オリヴィアは移動を繰り返す生活について次のように言う。

お父さんが農場の季節労働者になったり、お母さんが手伝ったりすることもあるけれど、自動車修理工や大工仕事をすることも多かった。求人ありという噂を耳にして、若い日本人の家族と連れだって太平洋岸の各州を移動したことも何度もある。私たちが移動するのは三つの理由があった。ひとつには運が悪かった—お父さんの職場が傾く、次の仕事を也得も、その新たな職場へ移動中に話が宙に浮いてしまう。50年代、60年代の日系人にとって、よい仕事につくのが難しかったということもある。お父さんは自分にふさわしい仕事が多々見つからなかった。三番目の理由は、お父さんお母さんともに結婚生活に不満を感じていて、引っ越しが不満のはけ口になっていたことだ。(6)

父が定職に就けないのは日系という人種的要因が

大きいと思われるが、子供のオリヴィアにとってそれは三つの理由のうちのひとつでしかない。彼女は父に仕事がないのを不安がるところか、「(移動を続ける)生活を楽しんでいた」と言う(6)。父は娘の前で差別や偏見に対し怒りを露わにすることはなかったであろう。サンディエゴの二世は戦後日系人であることは恥を意味したため、誰も日系人であるとは言いたくなかったと言っている。日系というエスニシティのために鉄条網と監視塔のある収容所に収監されたのであり、アメリカ人として主流社会に受け入れられるには、日系アメリカ人(Japanese American)の「日本人(Japanese)」の部分を棄却しなければならないという意識が働いた。また、この時期は冷戦体制下にあり、アングロ・コンフォーミティー白人中産階級の生活様式や価値観をアメリカの一元的な生活様式や価値観とする概念—が強化され、アメリカに住むすべての人々がめざすものとされた。収容所から出た日系人にはこの同化主義がより強く作用し、アメリカ人になるために彼らは日本とのつながりを断ち切り、同化に励みモデル・マイノリティになっていった。オリヴィアの父は、強制収容のトラウマと同化志向により日系人に対する差別が認識できなくなっているか、または日系人を差異化する主流社会の価値観を内面化し、被差別者の地位を自ら受け入れていると解釈できる。

同化志向は中産階級への上昇志向と結びつく。オリヴィアの父はギブソンの町で友人と自動車修理場の共同経営者となる。実質的には修理工にすぎないのに企業新聞の定期購読者になり、妻が仕事をもちたいと言っても認めず、彼女は専業主婦となり教会や図書館に通う。また、オリヴィアが裸婦の描かれたトランプを見つけた時、彼は「男は男でなければならない」と言う(94)。白人中産階級の男性の男らしさを模倣しようとしているのであるが、中産階級の父権の家庭の成立には父親が安定した職業についていることが要件である。彼は「毎日ひとつもミスをしないように、用心して暮らしている……仕事場では正確であるように

気をつけている……おれは完璧にやりたい」と娘に言う (14-144)。仕事上での失敗は経済的な損失だけではなく、中産階級の家庭を維持するのに必要な男らしさの喪失をも意味する。また、一握りの日系人しか住まない町で、彼が自動車修理の仕事でミスをせずに「完璧である」ことを示さなければならない相手は白人の客、つまり主流社会である。主流社会に対して彼は「完璧」でなければならないのであり、これは日系人にモデル・マイノリティであることを求める主流階級からの圧力の強さを表しているであろう。

人種差別に抵抗しないモデル・マイノリティは主流社会にとって都合がよい存在である。アイデンティティ認識をめぐる回想録であるリディア・ミナトヤの『雪の中で高僧に話しかける』では、語り手/主人公のリディアの父—博士号を持つ科学者—が長年勤めた研究所を定年退職する3年前に研究助手と同じ給料であったことを知る。リディアは父が受けた長年の差別と搾取に怒り、「とことん会社側を訴えろ！」と叫ぶ (21)。しかし、父は怒るどころか、「30年以上、毎朝目覚めると早く研究所に行きたくて仕方がなかった。大好きな仕事ができる機会が与えられたことを誇りに思っている」と言う (21)。収容所を出た後、低所得者の住む住宅地から白人中産階級の住む郊外の住宅地へと移住しアメリカン・ドリームを実現したと思っていた父にとって、会社側を訴えることは人種差別の犠牲者であったことを認めることである。それは金銭的な損失よりも「大きな損失」であり (21)、絶対に容認できないことである。リディアは父の人生を「良い学生」、「良い使用人」、「忠実で良い従業員」だった人生と言うが (20)、彼のモデル・マイノリティの人生は主流社会からの差別や搾取を内包している。モデル・マイノリティは主流階級が公民権運動を進める黒人たちを牽制する政治的目的でも使用された言葉であり、自分たちの特権的地位を脅かさないように構築されている概念である。アメリカ社会にはマイノリティを沈黙させモデル・マイノリティとして生きていくことを強いる圧力が存在するが、リディア

の父の物語は同化志向が白人と対等の地位を日系人に約束するものではないこと、同化主義が内包する主流社会による裏切りや偽りを表している。

共産圏を仮想敵国とするナショナリズムの中で、白人中産階級の生活様式や価値観はあたかも自らが求める幸福の形としてアメリカ人の心の中に内部に書き込まれていったが、郊外に家を持つというアメリカン・ドリームの実現は白人中産階級に与えられた特権であった。ヒサエ・ヤマモトの「フォンタナの火事」は、ある黒人一家が戦争直後にロサンゼルス郊外のフォンタナに家を買ったが、同じコミュニティに黒人が住むことを好まない白人によると見られる放火で殺された事件を描いている。また、彼女は同じ作品の中で日系家族も白人コミュニティに歓迎されていないと述べ、語り手の日系女性が白人コミュニティに住んでいられるのは白人の夫のお蔭であるとしている。郊外には多くの白人復員兵が家を購入したが、彼らには低金利融資などの特権があった。それは郊外の家に住む白人のアメリカンファミリーを豊かなアメリカの象徴として対外的に流布したい国家戦略を表している。『フローティング・ワールド』には、復員兵のコリー・アサノの話が出てくる。彼は復員兵援護法でヒナの鑑別法を学び孵化場で働いているが、ギャンブルがもとで多額の借金を抱え、結局は家族も家も仕事も失うことになる。復員兵援護法の恩恵を受けたということは彼が忠誠審査でYesと答えアメリカ軍に入隊したことを示すが、たとえ復員兵であっても差別から無縁であったわけではない。「二世兵士はその功績の後でさえ、アメリカ社会からの拒絶を認識した」のである (竹沢127)。サンディエゴの二世は、「アメリカ人であることを証明するために二世は入隊し、非常に多くの人が命を犠牲にしたにもかかわらず、彼らの功績はなかなか正式に認められなかった」、「日系コミュニティを救ってくれたのは戦時中の442部隊の活躍であり、彼らは私たちにプライドを与えてくれたが、彼らは現在でも自分たちのことを話そうとしない」と語っている。二世兵士は国家に忠誠を誓い、命をかけて戦った

にもかかわらずアメリカ人として認められなかったものであり、彼らの深いトラウマを復員兵コリーの表象の中に見ることができるだろう。彼のギャンプルへの耽溺はその傷の深さを示唆している。彼は郊外に住む白人復員兵と同様に国家に尽くしたのであるが、人種差別のためにアメリカン・ドリームの実現からは程遠い生活を強いられている。

ディヴィッド・ムラの『肉体が記憶と出会う場所—人種、性、アイデンティティをめぐる漂泊』(1996)及び『僕はアメリカ人のはずだった』(1991)によると、彼の両親はアメリカン・ドリームを実現したかのように見える。7年ごとに引っ越しを繰り返し、そのたびに社会的ステータスを上昇して最終的には上位中流階級が住む郊外に落ち着く。両親は過去を語ることはなく、ムラが強制収容所のことを尋ねても、父は「収容所の生活は楽しかった」、母は「そんな昔のことはどうでもいいことだ」と言うだけである(1991 195)。その一方で、父は「白人中流社会のアメリカ人を模倣し、不平不満を言わずに勤勉に働こうと努力」し企業の重役へと出世する(1991 218)。父の同化志向と白人化は名前の表記の変容に表れている。「最初の名前はカツジ・ウエムラだった。その後、彼はトマス・カツジ・ウエムラと改名した。ついで、トム・カツジ・ウエムラ。そして、トム・K・ムラ」になり、名前からは日系人であるかどうかは分からなくなっている(1991 227)。その上、両親の同化志向は子供にも向けられる。子育てにおいて日系人であることは重要ではなく、「世間が人間を判断する材料は、学校での成績や品行であり、運動能力であり、どんな服を来ているか、どんな家に住んでいるか、父親はどんな車に乗っているか」であると子供に諭す(1996 82)。ムラは学業でもスポーツでもトップであることが求められた。両親は「白人よりもさらに白人らしくなる」ことでアメリカ人であることを証明しようとしたのである(1996 244)。

ムラは両親の影響を受けて日系人であることを否定し、白人中産階級に溶け込みたいと努力す

る。白人の友人に「まるっきり白人のようだ」と言われると勝利感を覚える(1996 83)。しかし、いくら自分は白人中産階級の一員だと思っていっても、主流階級は自分を有色人種だと差異化していることを認識していく。白人の女性をデートに誘っても相手にされない。しかも、父の同化志向が自分のセクシュアリティにも影響を与えていることに気がつく。ムラは自分の白人女性への願望は「白人が美しさの基準」という主流社会の価値観をたたきこまれ、「白人が優れているという神話」を信じ込んできたことと関係していると考え(1996 232)。白人女性のセクシュアリティへの願望は白人化への願望を表す。同時に、白人女性に拒絶されるたびに人種差別と劣等感を感じたことから、白人化への願望は強制収容のトラウマ、日系というエスニシティを否定された恥の意識と結びついていることを認識する。「アメリカと同化することで、二世は自分たちが有罪とされていた要素、つまり日本人らしさを降り捨てた……彼らに続く世代は日本人らしさではなく、恥の感覚だけを受け継いだのは不思議ではない」と、日系であることに対する「恥の感覚」や劣等意識だけを三世は受け継いだと言う(1991 218)。彼のアイデンティティは、「大統領命令第9066号の署名と日系アメリカ人社会全体の強制収容に直接結びついている」とし(1996 246)、モデル・マイノリティとなって白人中産階級に同化しても「先祖の血」、つまり人種の違いを隠すことはできず人種差別からは逃れられないと考える(1996 243)。

二世の両親は強制収容の記憶に沈黙し同化することで「二級市民」とされた恥ずかしさを忘れようとしたと言うが、ムラは彼らの沈黙の底に隠された怒りを認識している。ムラの詩集*After We Lost Our Way* (1989)の一篇、「二世のピクニック: アルバムから」は442部隊で戦った叔父、生活のためにミンクを育てる叔母、スポーツマンの父について書いているが、父の描写の最後は「彼は／白人となるために一生懸命働き／息子を殴った」である(1989 14)。強制収容の体験など遠い昔の出来事であるかのようにふるまい、勤勉に働

く父。それは主流階級に受け入れられるためであるが、そのためにどれだけの精神的圧迫や抑圧に耐えてきたのか。父の強制収容のトラウマやモデル・マイノリティであるために強いられた精神的犠牲は肉体的な暴力となって息子のムラに加えられる。二世の怒りはその沈黙によりさらなる精神的、肉体的痛みとなって三世に伝えられている。また、ムラは叔父について、「かつて、一晩中彼はドナウ川近くの溝に横たわり／手で自分の腸を押し込んだ。国に生還した時／アパートは借りられなかった。「シカタガナイ」／彼は言った／仕方がない。」と書く(1989 14)。ムラは叔父が命を犠牲にしてアメリカのために戦ったにもかかわらず、人種差別を受けたことにいら立つが、それ以上に「シカタガナイ」と沈黙する態度、主流社会に受け入れられるためにとる卑屈な態度に怒りを感じている。モデル・マイノリティとは、「名誉白人に祭り上げて、われわれの歴史や遺産を無視するために作り出されたもの」であり(2006 4)、主流社会にとって都合の悪い人種差別や強制収容問題などを日系人に忘れさせる概念であるからである。二世の沈黙には、「そんな話は重要ではない、恥ずべき、忘れ去るべき話だ」とする主流社会側の力が関係しており(1996 19)、モデル・マイノリティである限り、目の前に存在する人種問題は顕在化されずアメリカを自由・平等・民主主義の国とする神話の正当化に加担させられる。同化を望み、日系人は自らの努力によりアメリカン・ドリームを成し遂げたとする主流階級からの称賛を鵜呑みにすることは、「きびしい現実、疑問やいまだ残る問題、二世をアメリカン・サクセス・ストーリーから遠ざけているもの」を隠蔽してしまう(1991 218)。ムラは二世の同化を批判する。「アメリカがいつか受け入れると信じることを拒否」し(1991 244)、沈黙から抜け出して体験を語り、日系人をモデル・マイノリティにしている力に抵抗することを二世に求めている。

ムラの同化への批判は、いくら白人化に努めようと日系である外見からは逃れられという自己認識を一つの契機としているが、『フローティング・

ワールド』にも同様の体験が述べられている。オリヴィアはギブソンの町で成長する中で、自分が周縁的な存在であることを認識する。

私たちが町にでると、こちらの見ていない時に、町の人たちはじっと私たちを見つめる。ギブソンの町には黒人はひとりもいなかった。白人とひとにぎりの日本人が住んでいるだけだった。白人の前で、私たちはいつもおとなしくしていた。(72)

彼女は日系コミュニティの外に出ると「じっと見つめ」られる存在であること、つまり主流社会には帰属しない「他者」であると自己認識している。父や周囲の日系人たちがいくら同化に努めようと、主流社会はその一員とは認めないことをここで実感している。また「白人の前で、私たちはいつもおとなしくしていた」と述べていることから、主流社会が持つ覇権が家族や日系コミュニティの人々を沈黙させ同化志向へと向かわせていること、同化への圧力がいかに日系人に抑圧的に働いているかを彼女が理解していたことがうかがえる。

オリヴィアは同化志向に抵抗する。それは両親が作った家庭を「実質的」なものではないと感じていることや(102)、彼らが底辺の人々として嫌うヒナの孵化場で働く鑑別士を尊敬する態度に表れている。差別や搾取の犠牲者である鑑別士と共に働く中で共感を寄せて行く彼女の姿勢は、ムラが「敗北した者」として一世に強い共感を持つのと似ている(1991 226)。戦前、一世は「帰化法」や「土地法」で差別され、アメリカの土地を所有することもアメリカ人になることも拒否された。その上、サンディエゴの二世が「強制収容で一番傷ついたのは一世だ」と語っているように、一世は強制収容の打撃から回復することはできなかった。ムラにとって一世の人生は、「強制収容所がおそろしいものであり、精神を押しつぶす抗しがたい力と権威を象徴するものであることを証明」するものであり(1991 226)、二世の同化志向では

見えない日系人への人種差別の現実を明らかにするものである。だから、彼は一世に共感するのである。またオリヴィアも、長期間労働を強いられ覚醒剤のデキセドリンを飲みながら必死に働く日系人の生活の中に、安い労働力として搾取されている日系人の現実を見る。自分たちはアメリカ社会の周縁に位置づけられているという認識こそが、一世から現在まで続く人種差別に抵抗する原動力となる。同化は主流社会の人種差別を支えるだけである。

二世はアメリカ人として認められるために日本とのつながりを断ち切ろうとしたが、人種差別に抵抗するには日系というエスニシティを肯定し、日系アメリカ人 (Japanese American) というアイデンティティを持つことが必要である。『フローティング・ワールド』のオリヴィアは、一世の祖母とのつながりを大切にする。生前、彼女は移動中の車のなかで家族の歴史や一世の暮らしについて多くの物語をオリヴィアに語る。そして死後は、オリヴィアに残した彼女の日記が一世の物語を伝えていく。先祖や過去とのつながりは自分が何者であるのかを教えてくれるものである。祖母の日記は所々日本語で書かれており、彼女は「日本語と英語、二つの言葉が好きだった。一方の言葉で十分に表現できない考えが、もう一方の言葉を使えばできる」と語る (109)。「日本語と英語」の両方を好むという表現に、日本の伝統や文化を受け継ぐ日系アメリカ人であることへの彼女の誇りが感じられる。ムラは1年間日本に滞在するなかで、「アメリカ文化の中でいかに自分が置き去りにされていたか」を認識し、アメリカでは感じたことのない「安らぎ」を感じる (1991 293)。アメリカ人になるために障害となった先祖 (日本) が自分に「安らぎ」を与えること、白人の文化が自分の文化ではないことを知り、自分は日系アメリカ人であることを認識する。また、『雪の中で高僧に話しかける』のリディアは、「本当のアメリカ人家族はみんな白人と思っている」社会で働くことにストレスを感じていたが (31)、離婚して日本へ返された一世の祖母を探して日本を旅す

るうちに先祖とのつながりを感じ、日系アメリカ人というアイデンティティに自信をもつようになる。

カドハタ、ムラ、ミナトヤの作品では、主人公／語り手が強制収容のトラウマから日本とのつながりを断ち切り主流階級への同化に励む二世の生き方に疑問を抱き、日系アメリカ人としての主体を維持することの重要性を認識する。三世は二世の同化志向を問題にすることで、彼らを強制収容し同化を強制したアメリカ国家に抵抗している。自分は日系というエスニシティを持つアメリカ人であるという認識は、先祖を同じくし、文化や伝統、歴史を共有する人々とのつながりを可能する。そして、それは他のエスニック・マイノリティとの連帯を可能にし、人種差別への共闘の力となっていく。アメリカ社会の周縁に生きる者同士の連帯にこそ、アメリカを本当の意味で多文化共生社会にする可能性が開かれる。

## 終わりに

カドハタ、ムラ、ミナトヤの三世作家の作品は二世が日系というエスニシティを否定していることを問題にしていると解釈できるが、アメリカ政府に公式の謝罪と補償を求めたりドレス運動を経験する中で、二世も日系の文化や伝統の重要性を認識していったと考えられる。運動の進展に伴い、公聴会や強制収容に関するイベント活動、またそれらを伝えるメディアによって日系人は補償問題に接する機会が増えるようになる。それにより、サンディエゴの二世が語っているように、三世が二世に強制収容について尋ね、それに対し二世が自身の収容体験を語り始めたのである。過去の記憶を語ることは心の底に押し込んでいた日系の文化や歴史を取り戻すことにつながる。人々がそれぞれの収容体験を語ることで、先祖や文化を共有し、強制収容という体験を共有する集団として日系コミュニティは再生したのではないかと思われる。その一つの例をサンディエゴの日系コミュニティに見ることができる。

サンディエゴの日系人は戦後沈黙を通したが、

20年ほど前からその体験を語り始めた。それはリドレス運動の進展で三世が二世の収容体験に興味を持ったからである。人々が過去を語り始めると、サンディエゴ・シティ大学の歴史学の教授であったエステス教授が始めた日系人の歴史や文化を残そうという取り組みに多くの日系人が参加するようになり、サンディエゴ日系歴史協会が設立された。今ではここに、たくさんの日系人の歴史を表す物品や資料が集められている。二世だけではなく、三世、四世がボランティアとして活動に参加している。

また、サンディエゴ日系歴史協会が中心となって強制収容体験を他のマイノリティの人々と共有し合い、人種差別に抵抗する運動へと発展させている。9.11の発生当時、メディアや政治家がこのテロ事件とパールハーバーをパラレルに扱い、イスラム系・アラブ系アメリカ人への暴力事件が多発したこと危惧した日系人は、サンフランシスコやワシントンD. C.で他のマイノリティグループとともに人権と差異への寛容を求めて行動を起こした。<sup>11</sup> サンディエゴの日系人もイスラム系、アラブ系アメリカ人が社会から排除されないように協力した。

イスラム系アメリカ人のグループに呼ばれて話をしました。彼らは主に教育関係者で、収容所ではどんな生活だったのか、みんなのようにして生き抜いたのかということを知りたがっていました。強制収容が起こることを想定し、その準備のために私の話を聞きたかったのです。そんなことは絶対に起きない、どのマイノリティグループにも起こることはないと言っていました。(セガワ)

9.11が起こった時、同じことをイスラム系の人たちにするんじゃないかと思って、みんな心配しました。三世の人たちもそう思っていました。子供たちも、こんなことしていたらまたパールハーバーと同じことになると言っていました。JACL(日系アメリカ人市民同盟)がそんなことになってはいけないと言って、みんなが集まって大統領に手紙を出しました。

(マルヤマ)

サンディエゴの日系コミュニティはもう二度と強制収容のようなことが起こらないように、収容に関する写真展などのイベントを開いたり、講演を行ったりして人々の教育や啓発に取り組んでいる。また、ボストン収容所の跡地に強制収容を記念する建物を建設する計画が進んでいる。この収容所はインディアン居留地に建設されたが、その背景には技術や能力をもつ日系人に灌漑整備と耕地開拓を行わせて居留地を農地として開発したい国家の思惑があった。この地はネイティヴ・アメリカ人と日系人という二つのマイノリティが国家によって強制的に移住させられ、労働をさせられてきた場所であり、国家による有色人種の支配と暴力を象徴する場所である。この地理空間には「植民地主義と人種主義が刻み込まれている」(石山 150)。<sup>12</sup> 強制収容の記憶とは国家の記憶とは異なる日系人のパールハーバーの記憶(対抗記憶)であり、マイノリティへの差別と排除を再生産してきたこの地に強制収容を記念する建物を建設することは、国家のマイノリティ支配に対し大きな抵抗を示すものとなるであろう。

## 謝辞

本稿に記載したインタビューは、サンディエゴ・コミュニティ大学のヴィッキー・マヒュー先生のご協力により可能となったものです。キク・ガーデンズのカヨ・ババ・プライスさんや、サンディエゴ日系歴史協会のリンダ・カナダさんには、インタビューに応じてくださる方々を紹介していただきました。ここに記し、心より厚くお礼申し上げます。また、インタビューに協力してくださったサンディエゴの日系人の方々にも感謝申し上げます。

## 注

<sup>1</sup> 2010年7月24日から8月11日にかけての約18日間カリフォルニア州サンディエゴに滞在し、キク・ガーデンズ(日系コミュニティによって一世のため



に建設された高齢者用アパート。現在ここに住んでいる二世は二人である)やサンディエゴ日系歴史協会で合計12人の二世に会い、インタビューを行った。

<sup>2</sup> *The Floating World*は『七つの月』というタイトルで邦訳が出版されている。このタイトルは、訳者の荒このみ氏がこの物語の一部が発表されたときにつけられていたタイトルを採用したものである。祖母が生まれた年の夏、不思議な現象が起きて、月のように明るい雲が七日間にわたって毎晩、空を横切ったという。この七つの月雲は吉兆なのだと、祖母が孫に語る逸話からきている。

<sup>3</sup> Gruenewald, 13頁。

<sup>4</sup> Jeanne Wakatsuki Houston and James D. Houston, 11-12頁。

<sup>5</sup> Uchida Yoshiko, 23頁。

<sup>6</sup> Gruenewald, 8-9頁。

<sup>7</sup> 忠誠審査とは次の二つの質問をさす。

第27項:「あなたはいかなる場所にあっても戦闘義務を果たすべく合衆国軍隊に進んで奉仕する用意はあるか」

第28項:「あなたは無条件でアメリカ合衆国に忠誠を誓い、外国や国内のいかなる攻撃からも合衆国を守り、また、日本国天皇をはじめ、いかなる外国の政府・権力・組織に対しても忠誠を示さず服従もしない、と誓うことができるか」

この二つの質問が人々に与えた苦悩については、たとえば、Gruenewald, 87-90頁、デイヴィッド・ムラの『肉体が記憶と出会う場所』, 30-34頁を参照のこと。

<sup>8</sup> リディア・ミナトヤは『雪の中で高僧に話しかける』の中で、母方の一人の叔父は忠誠審査にnoと答え、もう一人はyesと答えたと書いている(43)。また、ムラは「忠誠審査をめぐる真つ二つに割れた家庭もあった。JACL支持派と“ノー・ノー”派に分かれた。日本で教育を受けた子弟つまり“帰米”がいる家庭で、対立はとりわけ深刻になった……二世の一部もまた忠誠審査に辛辣だった……FBIも事態の收拾に乗り出すことはなく、人が溢れ、今にも壊れそうなバラックでの緊張は募る一方だった」と書いている(前掲書 52)。

<sup>9</sup> 二世だけで編成された442部隊は、“Go for broke”を合言葉にイタリア戦線で勇敢に戦ったと言われている。“Go for broke”は442部隊をさして使用さ

れることが多い。

<sup>10</sup> モデル・マイノリティという言葉が初めて使用されたのは、1966年、『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』誌に掲載された社会学者のウィリアム・ペーターセンの記事、「成功物語:日系アメリカ人スタイル」の中であった。その後、この用語はアジア系アメリカ人全体に使われるようになった。エレイン・キムはモデル・マイノリティについて次のように述べている。「アジア人は控えめで、つつまじやかで、行儀が良く、法律を遵守し、教育に熱心で、一生懸命に働き、強い家族の絆としつけの行きとどいた家庭を形成していると思われる。特に、アジア人は不平を言ったり、反抗したりしないと称賛されている……社会福祉の援助を得て「アメリカ人」の重荷になる代わりに「自分たちのことは自分たちで面倒をみる」……と言われている。」(177)

<sup>11</sup> 9/11の日系アメリカ人の抗議行動については、Rosenbergの256頁を参照。

<sup>12</sup> ボストン収容所とインディアン居留地の関係については、土井幸一郎「日系アメリカ人収容所とインディアン政策: 2つの少数民族政策の交錯」、石山徳子「コロラド・リバー・インディアン居留地の農地開拓と日系人労働力: ボストン収容所の地理空間」を参照のこと。

## 引用・参考文献

- Gruenewald, Mary Matsuda. *Looking Like the Enemy: My Story of Imprisonment in Japanese-American Internment Camps*. Troutdale: New Sage Press, 2005.
- Houston, Jeanne Wakatsuki, and James D. Houston. *Farewell to Manzanar*. Boston: Houghton Mifflin, 2002.
- Kadohata, Cynthia. *The Floating World*. New York: Ballantine Books, 1989. (カドハタ, シンシア『七つの月』荒このみ訳, 講談社, 1991年)
- Kim, H. Elaine. *Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context*. Philadelphia: Temple UP, 1982.
- Lee, Hsiu-chuan. “Interview with Cynthia Kadohata.” *MELUS* Vol.32, no.2 (Summer 2007). 165-186.
- Minatoya, Lidya. *Talking to High Monks in the Snow: An American Odyssey*. New York: Harper Collins, 1992.
- Mura, David. *After We Lost Our Way*. New York:

- E.P. Dutton. 1989.
- . *Turning Japanese: Memoirs of a Sansei*. 1991. New York: Grove Pr. 2006. (ムラ, ディヴィッド『僕はアメリカ人のはずだった』石田善彦訳, 柏艚社, 2003年)
- . *Where the Body Meets Memory: An Odyssey of Race, Sexuality and Identity*. New York: Doubleday, 1996. (『肉体が記憶と出会う場所—人種, 性, アイデンティティをめぐる漂泊』山中朝晶訳, 星雲社, 2006年)
- Okada, John. *No-No Boy*. 1957. Seattle: U of Washington P, 1979.
- Rosenberg, S. Emily. *A Date Which Will Live: Pearl Harbor in American Memory*. Durham: Duke UP, 2003.
- Uchida, Yoshiko. *Desert Exile: The Uprooting of a Japanese-American Family*. Seattle: U of Washington P. 1984.
- Yamamoto, Hisaye. "A Fire in Fontana." *Seventeen Syllables and Other Stories: Revised and expanded Edition*. New Brunswick: Rutgers UP, 2001.
- 石山徳子「コロラド・リバー・インディアン居留地の農地開拓と日系人労働力: ポストン収容所の地理空間」, 立教アメリカン・スタディーズ 30, 2008年, 135-152頁。
- 竹沢康子『日系アメリカ人のエスニシティー—強制収容と補償運動による変遷』, 東京大学出版会, 1994年。
- 土井幸一郎「日系アメリカ人収容所とインディアン政策: 2つの少数民族政策の交錯」, 福島大学商学論集 70巻第3号, 2002年, 3-26頁。